

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## ＜講演＞漢語が日本語に溶け込むとき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-03-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田中, 牧郎 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/00000928">https://doi.org/10.15084/00000928</a>

# 講演 漢語が日本語に溶け込むとき

田中 牧郎 (国立国語研究所准教授)

## 近代の語彙における漢語

私は、主に書き言葉で日本語の語彙が近代にどのように変わっていったかを、お話したいと思います。

日本語の語彙は近代に大きく変わりました。そのもつとも重要な変化の一つが、近代的な概念を表すため明治期に新しい漢語が数多く使われるようになり、その一部が日本語のなかに溶け込んでいったことです。そのような歴史をたどった漢語については、すでに諸先生方が多くの本で書かれております。図1にあげたのは一般向けに書かれたもののうちのごく一部ですが、さまざまな観点から近代の漢語が果たしてきた役割



- ・ 柳父章『翻訳語成立事情』(岩波新書、1982年)
- ・ 惣郷正明・飛田良文『明治のことは辞典』(東京堂出版、1986年)
- ・ 飛田良文『明治生まれの日本語』(淡交社、2002年)
- ・ 佐藤亨『現代に生きる 幕末・明治初期漢語辞典』(明治書院、2007年)
- ・ 田中牧郎『近代書き言葉はこうしてできた』(岩波書店、2013年)
- ・ 今野真二『日本語の近代 一はずされた漢語』(ちくま新書、2014年)

図1 近代の漢語の研究書 (一般向け)



### 田中 牧郎

東北大学大学院文学研究科博士課程単位取得退学、東京工業大学大学院社会理工学研究科博士課程修了、博士(学術)。昭和女子大学専任講師、国立国語研究所主任研究員、同グループ長を経て2009年より現職。  
専門分野：日本語学(日本語の歴史、言語コーパスによる日本語研究)

が研究されてきております。

しかし、近代の新しい漢語が全体的にどれくらいあり、それらがいつごろできたか、そのうちの程度が日本語に溶け込み現代に伝わったか、淘汰されてなくなっていた漢語と現代にも生きる漢語の違いはどこにあるのかなどについては、研究することが難しいためなかなかわかっていません。近代の語彙がどうやってできたのかは不明なことが多く残っています。近年、言語の全体像を把握し、細部の動きもとらえることができる言語データベースとして、「コーパス」が整えられてきています。日

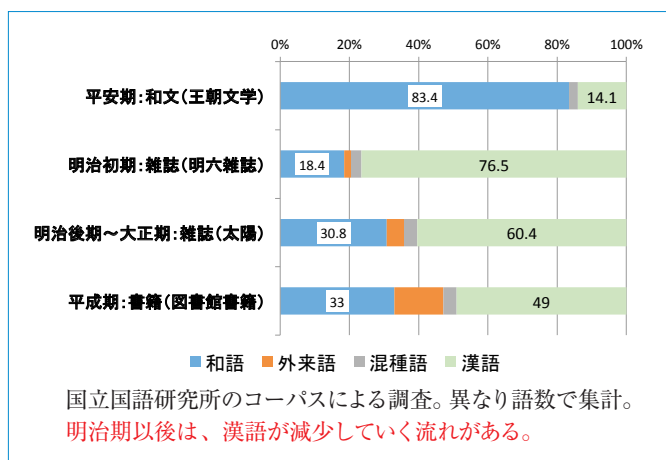


図2 漢語と和語の比率の歴史

本語のコーパスは、私たち国語研究所を中心に構築が進んでいます。コーパスを使って、日本語の歴史や現代日本語のありようを、さまざまな観点から正確に記述していく研究を進めております。

図2は、国語研究所のコーパスを使っ

て、漢語と漢語に  
対立する和語を中  
心とした語彙の比率

の歴史をまとめたものです。平安期の仮名で書かれた王朝文学作品は八三・四パーセントが大和言葉、和語でした。鎌倉期、室町期、江戸期のコーパスは現在構築中で、まだデータを示せるものがありませんが、今日の話の中心になる明治時代では、その初期の雑誌『明六雑誌』(一八七四年創刊)のコーパスでは、和語はわずか一八・四パーセント、漢語は七六・五パーセントになっています。この平安期から江戸期への過程について研究することも重要ですが、このグラフの下の方の明治期からあとを見ても大きな変化がございます。漢語がだんだん減少して和語は増加していく流れが見られます。この明治以後の時代だけでも、漢語と和語の役割が大きく変化していったことが推測できます。

### 語種とは何か—和語・漢語・外来語—

今、漢語とか和語とか言ってきましたが、日本語学、言語学では厳密に定義されていますが、一般の方にきちんとご理解いただくのは少し難しいところがございます。たとえば、「桜」と、それに「花」をつけた「桜花」は大和言葉ですが、それを音読みで「おうか」と読めば漢語です。日本固有の言葉を「大和言葉」と言いますが、漢字で書いてあっても訓読みすれば大和言葉、和語です(図3)。それに対して、漢語には、古典中国語から借用した語彙と、音読みする語彙、そして日本で作られた和製漢語が含まれます。

そして、大和言葉には「桜」<sup>さくら</sup>、「桜花」<sup>さくらばな</sup>といった詩歌に詠まれる優雅なものもあれば、「くさめ」「くしゃみ」「むずがゆい」といった感覚的な俗っぽい語彙もたくさんあります。漢語にも、詩に使う言葉もあれば、

近代になって社会的な制度が変化することでできた言葉もたくさんあります。

また、外来語とは、古典中国語以外の他言語（主として西洋語）から借用した語彙で、日本でつくられた和製外来語も含まれます。たとえば、チェリー、デリケート、アレルギーなどです。

このように、和語と漢語はそのつくられ方が、日本固有か、古典中国語由来かで分けられ、外来語の場合は西洋語由来のつくられ方をしているということで、厳密に、どこでその語彙がつけられたかということではありません。語

のかたちが、日本固有語、古典中国語、西洋語のうち、どの言語らしいかによる分類と言えます。この語種の違いが、語彙のなかでの役割の違いに対応しています。そして、語種の観点から語彙の歴史を見ていくと、さまざまな日本語の問題が見えてきます。その意味で、日本語の語彙の歴史を考えると、語種に注目することがきわめて有意義です。今日はその

和語	日本固有の語彙、訓読みする語彙 桜(さくら)、桜花(さくらばな)、花見、愛(め)でる、粉(こ)、粉(こな)、くさめ、くしゃみ、むずむず、むずがゆい
漢語	古典中国語から借用した語彙、音読みする語彙、日本でつくられた和製漢語も含む 桜花(おうか)、賞美、花粉、鼻炎、炎(えん)、敏感、愛、美術、学校、悪化
外来語	古典中国語以外の言語（主として西洋語）から借用した語彙、日本でつくられた和製外来語も含む チェリー、デリケート、アレルギー
混種語	和語・漢語・外来語が2種類以上組み合わさった語 さくらんぼ、愛する、花粉アレルギー

- ・ 語種とは、語の形が、日本固有語・古典中国語・西洋語のうち、どの言語らしいかによる分類と言ってよい。
- ・ 語種の違いが、語彙のなかでの役割の違いと関わる。
- ・ 日本語の語彙の歴史は、語種の観点から描きやすい。

図3 語種とは何かー和語・漢語・外来語ー

- ・ 言語研究のためのデータベース
- ・ 実際に話されたり書かれたりした生の言葉が集積されている
- ・ 研究対象の言語を代表できるように資料が選定されている
- ・ 電子化され様々な情報がタグ付けされている
- ・ 誰でも使うことができる
- ・ 英語をはじめ世界の主要な言語で構築が進んでいる
- ・ 日本語のコーパスは国立国語研究所が中心になって構築中  
『日本語歴史コーパス 平安時代編』(平安時代の和文)  
『明六雑誌コーパス』(明治初期の学術総合雑誌)  
『太陽コーパス』(明治後期～大正期の総合雑誌)  
『近代女性雑誌コーパス』(明治後期～大正期の女性雑誌)  
『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(現代の書き言葉)  
『日本語話し言葉コーパス』(現代の話し言葉)  
「UniDic」という電子化辞書で単語情報を自動付与できる

図4 コーパスとは何か

うち漢語について主に焦点を当てていきます。

## 近代語のコーパス

私どもの研究所では、近代語のさまざまなコーパスをつくっています。コーパスについてなじみのない方もいらっしやると思いますので、少し解説をしておきます(図4)。

コーパスとは、言葉の研究のためのデータベースです。実際に話さ

れたり、書かれたりした生の言葉をたくさん集め、それがコンピュータ上に集積されています。研究対象の言語を代表できるように資料が選定されており、研究目的に応じてさまざまなかたちで取り出せるようになっていきます。そして、検索のためにさまざまな情報がタグ付けされています。特に日本語の場合、分ち書きされないとか、漢字や片仮名などさまざまな文字を使う表記が多様であるため、タグ付けをきちんとしておくことがきわめて重要になります。

もう一つ重要なことは、それをつくった研究者が使うだけではなく、誰でも同じデータベースを使い、そこからあらわれる言語現象をもとに、みんなで議論することができるといことです。英語をはじめ世界の主要な言語で構築が進んでいますが、日本語のコーパスは私どもの研究所が中心になって構築中です。古いところでは平安時代から、本日紹介する近代の書き言葉では『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』『近代女性雑誌コーパス』を構築しております(図4)。

ちなみに、「UniDic」という電子化辞書で単語情報を自動付与できるようになっています。日本語は分ち書きされませんし、多様な表



図5 国立国語研究所のコーパス

記があります。それらを同じように単語で集計し、見出しをつけて、どんな言葉が何回、どのように使われているかが、自動的にわかるようにする電子化辞書「UniDic」を開発中です。

私どもの研究所のホームページから(図5)、時代順に平安時代から現代まで七つのコーパスを見ることが出来ます。また、単語情報をつけるための「UniDic」も時代別にあります。HPからダウンロードしていただけるものがたくさんありますので、ご関心のある方は、是非使っていただきたいと思います。

本日は、近代語のコーパスを使いながら近代の漢語について考えていきます。

## 『明六雑誌コーパス』と『太陽コーパス』

『明六雑誌』は、のちの時代に大きな影響を与えた学術啓蒙雑誌です。当時の洋学者たちが、西洋から取り入れた新しい考え方を国民に啓蒙する目的で創刊し、明治七(一八七四)～七五(一八七五)年の二年間にわたって数十冊刊行されております。西周(一八二九～九七)、福沢諭吉(一八三五～一九〇二)ら一六人が書いており、語数は約一八万語と



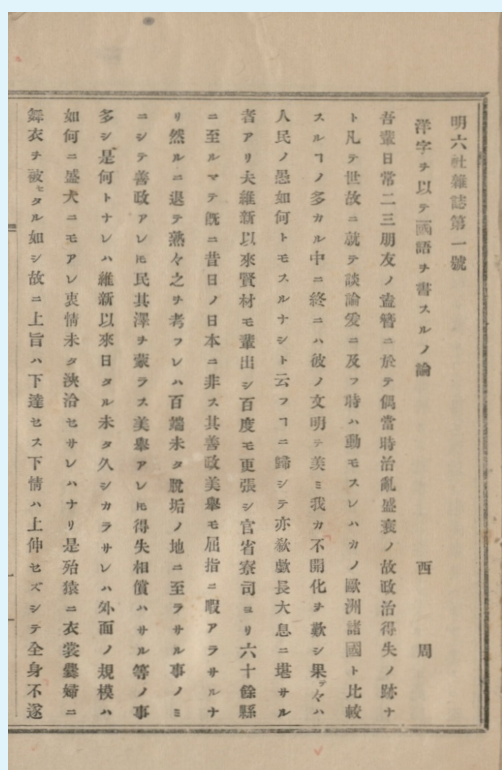
『太陽コーパス』に比べると少ないのですが、これに単語情報をつけて  
 図6のように画像をあわせて読むようなかたちで二〇一二年に公開しております。

また、『太陽』は、明治二八（一八九五）年、さきほど清水先生のお話にてできた国語調査委員会ができる数年前に創刊された総合雑誌です。この前年に始まった日清戦争（一八九四～九五）に勝利して、これから社会が大きく変わっていく時期に創刊されたもので、読者、ジャンルがきわめて広く、著者も『太陽コーパス』にいた五か年分六〇冊だけでも一千人になります。私どもは、創刊号から六年から八年刻みで、選んだ年についてはすべて各年一二冊ずつ計六〇冊の全文を対象にコーパスを構築しました。総文字

数は約一、四五〇万字、約八〇〇万字になります。これは二〇〇五年に公開し、現在単語情報付与の作業を進めているところです。まだ完全に終わっていませんので、現在は『太陽コーパス』はCD・ROMとして入手していただいて（博文館新社刊行）、解析する辞書「Unidic」を国語研究所のHPからダウンロードしていただいて、これにかければ、単語の頻度等を取付することができ

## 『明六雑誌コーパス』と『太陽コーパス』における語種構成比率

図7は、『太陽コーパス』で「桜花」を検索した画面です。「桜花」という文字の前後の文脈がでてきます。そして、何年の何号の、誰が書いたどの記事にでてくるか一覧で表示されます。たとえば、一番右側に話者と種別で表示されていますが、四番目の「桜花」の例は、本居宣長（一七三〇～一八〇二）の、和歌にでている場合です。それには典拠が表示されています。この画面を見るだけでも、語彙がいつごろ使われていたか、どんな人が使っていたか見当をつけることができます。



学術啓蒙雑誌『明六雑誌』  
 （明治7～8(1874～75)年刊）の全文を対象  
 総語数：約18万語  
 著者数：16人  
 単語情報によって検索できる  
 原文画像とリンクあり  
 2012年公開  
 国語研サイトから無料ダウンロード可

図6 『明六雑誌コーパス』

ファイル編集ツールヘルプ

検索文字列    フィルタ    コーパス    検索オプション

本文    桜花

前文脈     で終る    検索    字体変換

後文脈     で始まる    クリア

no	前文脈	キー	後文脈	雑誌名	年	号	題名	著者	位置	欄名	ジャンル	文体	話者	種別	
1	月を眺み、散策せんに	は興厚し無し、	桜花	太陽	1895	01	京都の新案内記	中川四明	P072B22	地理	NDC291	文語			
2	遠きは朝に驚となり、	近きて是は驚て	桜花	太陽	1895	01	正月	大橋之羽	P157B03	家庭	NDC386	文語			
3	も人の朝に結まはなし、	さるに我が	桜花	太陽	1895	02	臺灣櫻島記	山田新策	P055B12	地理	NDC295	文語			
4	こと能はず、若し夫れ、	朝日に匂ふ山	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P094B16	雑録	NDC914	文語	本居宣長	讀文	
5	に睡る心地するなり、	現に華貴の子が	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P094B18	雑録	NDC914	文語			
6	の子が桜花を憐の意とし、	騎兵の馬が	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P094B18	雑録	NDC914	文語			
7	遠、朝は、我も彼も大抵同じ、	而して	桜花	太陽	1895	02	月と花	三宅雪嶺	P095A09	雑録	NDC914	文語			
8	一世の推す所と爲り、	其富を味ひ	桜花	太陽	1895	02	明治の我園に關す	野口華章	P102B26	雑録	NDC920	文語			
9	而して諸の衣裳提標は黒地に帝冠に	桜花	太陽	1895	03	京都の都院	*	P122B30	芸苑	NDC386	文語				
10	の鳥さるべきこととならずや表に描く	桜花	太陽	1895	03	山沢と玉章翁	三輪青谷	P170B16	美術	NDC721	文語				
11	漸くおまじ彩露録として未だ去らず	桜花	太陽	1895	03	山沢と玉章翁	三輪青谷	P170B19	美術	NDC721	文語				
12	歌集等の如き詩にて應酬筆の	坂山	桜花	太陽	1895	03	平安楽朝記を博覧会	野口勝一	P188B07	社会	NDC606	文語			
13	るも諸君達少に過ぎず、	櫻花に已に續いて	桜花	太陽	1895	03	平安楽朝記を博覧会	野口勝一	P189A06	社会	NDC606	文語			
14	なれば他家のものともを羨み、	手に	桜花	太陽	1895	04	加藤清正(承前)	小倉秀實	P047A09	史伝	NDC289	文語			
15	北京の城上空たかく、	廊下は雲か	桜花	太陽	1895	04	今様新体詩	多	P115B16	文苑	NDC911	文語			
16	開かれたり、	其他の地に到りては、	桜花	太陽	1895	04	近衛公の家風	大橋之羽	P115B01	家庭	NDC289	文語			
17	佐吉神田に詣て、	文に近來る	桜花	太陽	1895	04	京都博覧会(上)	野口勝一	P189B21	社会	NDC606	文語			
18	には無味に歸すること、	恰も春風亂和	桜花	太陽	1895	05	文芸上の倫理	南睦夫	P020A13	論議	NDC901	文語			
19	る此節月ぞ、	顔に照しかりける中にも	桜花	太陽	1895	05	日本と欧米	熊田雄軒	P022B07	語説	NDC361	文語			
20	有す、	天に月光の沈つたるあり、	地に	桜花	1895	05	感情を讀して詩人	右橋之月	P035A24	語説	NDC910	文語			
21	地寺亦た名あり、	釋迦の東に在し、	櫻	太陽	1895	05	京都の新案内記	中川四明	P057B20	地理	NDC291	文語			
22	り、	日本の名勝と讃ふべし、	殊に近來	桜花	1895	05	京都の新案内記	中川四明	P057B26	地理	NDC291	文語			
23	ば、	龜嶺は西に見え、	千鳥島の湖には	桜花	太陽	1895	05	京都の新案内記	中川四明	P058B06	地理	NDC291	文語		
24	に在りては富士山の如く	花に在りては	桜花	太陽	1895	05	我邦風土の美	野口勝一	P096A23	雑録	NDC701	文語			

図7 『太陽コーパス』で「桜花」を検索した画面

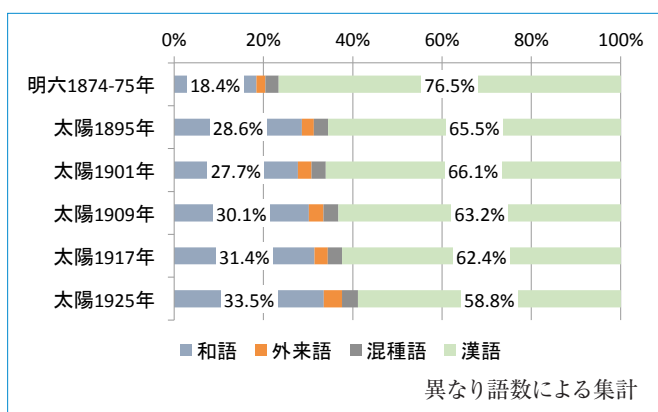


図8 『明六雑誌コーパス』『太陽コーパス』の語種構成比率

安榮(安らかに榮えること)    易直(安らかで素直なさま)  
 一姓(出身を同じくすること)    遺力(残された力)  
 役使(命令して使うこと)    外顯(外に現れること)

外交に於ては他邦の民情及び之を統治する所の制度を知り以て  
 我国人の安榮幸福に至る可き目的を定め  
 (『明六雑誌』10号・杉亨二「真為政者の説」1875年)

本居宣長の「式島の日本心を人間ば朝日に香ふ山桜花」と詠  
 ぜしは即ち此易直の質を以て我が国民の氣風に烙印を居ゐたる  
 者にて  
 (『明六雑誌』32号・西周「国民氣風論」1875年)

図9 『明六雑誌コーパス』に一定頻度以上あり、『太陽コーパス』にない漢語(一部)

『明六雑誌コーパス』と『太陽コーパス』の語種構成比率を一覧にすると、図8のようになります。さきほどは平安期から現代までを大きく並べましたが、明治七(一八七四)年から大正一四(一九二五)年までに限って語種構成比率を見ても、漢語は次第に減つていき、その分、和語が増えていくことがわかります。外来語、混種語はこの時期、大きな変化はありません。

漢語が減っていくので使われなくなる漢語が多いだろうという見当がつきます。図9にあげた「安榮」「易直」「一姓」などは、『明六雑誌』

にはかなり使われていますが、『太陽』ではまったく使われていません。

ちなみに、「外交に於ては他邦の民情及び之を統治する所の制度を知り以て我国人の安楽幸福に至る可き目的を定め」(『明六雑誌』一〇号・杉亨二「真為政者の説」一八七五年)で、「我国人の安楽幸福に至る可き」の「安楽」という語は、安らかに栄えることであることは、字を見れば見当はつきますが、現代語ではすでに使われておりません。『太陽コーパス』の時代、つまり明治後期に使われなくなっていた語です。このように、明治初期にた

くさんあった漢語の多くが使われなくなっています。

一方、『太陽コーパス』の初めのころの年次、明治二八(一八九五)年、明治三四(一九〇二)年には一定頻度以上ありますが、後半の大正六(一九一七)年、大正二四(一九二五)年にはない漢語の一部を図10に示します。「**𩇛𩇛**」(アイタイ、雲などが厚く空を覆っていること)、「**𩇛𩇛**」(イイ、よろこび楽しむさま)など、**𩇛𩇛**が厚く空を覆っていること、「**𩇛𩇛**たる処」といった言い回しにある「**𩇛𩇛**」という語は、数十年のあいだにまったく使われなくなっています。

𩇛𩇛(アイタイ、雲などが厚く空を覆っていること)  
怡怡(イイ、よろこび楽しむさま)  
畏憚(おそれて遠慮すること) 衣袂(イベイ、着物のたもと)  
叡聖(徳があり賢明であること)

氏が着色画中の傑作たるが如し紫雲**𩇛𩇛**たる処光明十方を照らし唯見る至尊の金容蓮上に儼然として円満の法界を現ずるを

(『太陽』1895年3号・岡倉天心「橋本雅邦」)

故れ余輩が所謂世詩は、花に譬へば桜花の如く、学問に配すれば哲学の如く、**怡々**として美人に対し、肅々として聖哲に対するが如し、

(『太陽』1895年11号・桐生悠々「社会と詩歌と」)

図10 『太陽コーパス』の当初の年次(1895年、1901年)に一定頻度以上あり、後の年次(1917年、1925年)にはない漢語(一部)

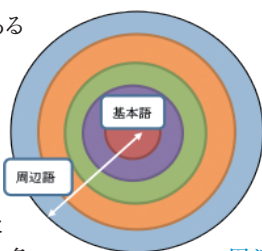
## 近代の語彙における漢語の性質

漢語が減っていくのは漢語の勢力が衰えるということを意味しているのですが、実際の語彙はもう少し複雑です。そう単純に漢語がすべて衰えていくことではございません。

語彙の構成について少し整理しておきます。語彙はある構造を持つて層をなしております。図11はそのことを同心円で表しています。中心部にきわめてよく使われる重要な語、すなわち基本語があり、周辺

**基本語**  
語彙の中心にある  
不動で  
高頻度な語  
明治期から大正期にかけて**周辺語化**する語彙の約80%は漢語  
明治期から大正期にかけて**基本語化**する語彙の約65%は漢語

**周辺語**  
語彙の周辺にある  
流動的で  
低頻度な語  
和語・外来語には動きが少ない



和語：基本語と周辺語に多い  
漢語：中間語に多い  
外来語：周辺語に多い  
周辺語化する語彙にも基本語化する語彙にも漢語が多い

図11 近代の語彙における漢語の性質



部にいくほど頻度が低く、あまり重要でない、滅多に使われない語彙となります。その図では五段階で示していますが、実際はこれが連続的に層をなしています。そして、現代語の語彙調査でも明らかになっていることですが、一般的に、中心の基本語には和語が多く、周辺の語彙に外来語が多くなっています。ただし、和語は基本語から中間語、周辺語まで万遍なく広がっています。

漢語の特徴は、中間語に多いということです。和語、漢語、外来語という語種の区別が、日本語の語彙を考えるときにきわめて重要な視点を提供すると最初に述べましたが、こういった日本語の語彙のなかでの役割を見ても、和語、漢語、外来語の一般的な性質を指摘することができます。中間的な段階に多い漢語が、大きく変化する近代においては外側へいき、周辺語化していくものが多くあります。

ところで、コーパスを使うと、数値を基準にいろいろなことができます。今日その基準のとり方を説明することは煩雑ですのでやめますが、ある基準で周辺語化する語彙を抽出すると、その約八割は漢語でした。一方、だんだん基本語化する語彙の約六五パーセントは漢語でした。つまり、非常に多くの漢語が語彙のなかでの位置を変えて動き、和語と外来語はあまり動きません。このことが近代における語彙の一つの特徴として指摘できます。

## 頻度が増加する漢語 — 基本語化する漢語 —

周辺語化する漢語は、さきほど述べた「贅黷」「易直」などといった言葉で、多くあります。その一方で基本語化する語彙にも漢語が多く

あります。今日はこの基本語化して現在にも生き残って重要な語としてはたらいっているものに注目していきたいと思います。

頻度が増えていくと同時に、いろいろな人が使うようになりま

す。そして、いろいろなジャンル、会話でも使われるようになります。使われ方も広がっていきます。そのことを、『太陽コーパス』を中心に見てみます。頻度の増加することを指標として、どのような漢語が、どのように基本語化していったか、つまり日本語に溶け込んでいったかを見ていきたいと思います。

さきほど、ある基準で基本語化する漢語を取り出したと申しましたが、実際は百数十語がリスト化されています。そのうちわかりやすいものをいくつか図12に示しました。たとえば、「野球」「映画」は江戸時代以前にはなく、近代になって欧米からはいつてきて日本社会に浸透していった語彙です。野球という語は、明治三四（一九〇一）年まで一回もでてきません。明治四二（一九〇九）年にでてきます。

映画は、大正六（一九一七）年から四回、二二回。その他、「投資」「摂取」「印象」「活躍」「努力」「実現」「優秀」「表現」といった漢語は、当初はなかったか非常に少なかったのですが、明治後期、大正にかけ



語	品詞	1874-5年	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年	計
野球	名詞				14	2	16	32
映画	名詞					4	22	26
投資	名詞-サ変可能			30	13	18	24	85
摂取	名詞-サ変可能		1	5	23	16	24	69
印象	名詞-サ変可能	1		6	55	70	39	170
活躍	名詞-サ変可能			1	12	47	82	142
努力	名詞-サ変可能	3	11	12	95	324	300	742
実現	名詞-サ変可能		10	22	84	177	97	390
優秀	形容詞-一般		4	3	24	59	44	134
表現	名詞-サ変可能		5	55	69	68	73	270

図12 基本語化する漢語の年次別頻度（一部）

愉快廻ぐりの建物、山羊車、鞦韆、競走場、ベースボール場等の  
設けあれば桑港の小児は絶えず茲に集へり。

（『太陽』1895年2号・山岸藪鶯「桑港繁昌記」）

早稲田対慶應の野球仕合は当分見られぬ事となれり

（『太陽』1909年14号・無署名「小是非」）

各劇場は活動写真、義太夫、手品等を興行して大入を占めようとし

（『太陽』1901年10号・上司子介「寄席と家庭」）

次の映画が始まった時、牧田はもうお重の隣へ席を遷してびつたり  
寄り添ひ乍らひそ〜話し合つて居た。

（『太陽』1917年10号・谷崎精二「淋しけれども」）

図13 「ベースボール」から「野球」へ、「活動写真」から「映画」へ

「投資」という言葉も「野球」と同じころ使われ始めます。『明六雑誌』四〇号では、「百円の価に十円を投ずる如く」とでてきますが、

「活動写真」という語も少し使われ続けます。当初のより原始的なありようから少しずつ、動き回る写真という「活動写真」から「映画」へ進歩していきます。その過程で、さまざまな語が試みられ、「映画」という語で定着していきます。新しい事物がはいってきて、それと同時にその名前が定着する、溶け込むというより、さまざまな語で表現しながら、どの語を使うと新しい事物にぴったりくるか、日本社会の一つの事物として定着していくか。そこには物事、事物、概念と、言葉、特に漢語とがかかわりあい、試行錯誤しながら、いつしか一つの語に決まっていくな過程を経ていると思われま。

て頻度を増やします。日本語として基本語化したわけですから。次に、いくつか具体的に見ていきましょう。

「ベースボール」から「野球」へ、「活動写真」から「映画」へ

まず「野球」という語です。いきなり野球がさかんになって「野球」という語が広がったという単純な話ではありません。初めはアメリカ

（図13）

「映画」もそうです。まずは、「活動写真」と表現されるところからで、大正時代になると「映画」という語が普通になっていきますが、「活動写真」という語も少し使われ続けます。当初のより原始的なありようから少しずつ、動き回る写真という「活動写真」から「映画」へ進歩していきます。その過程で、さまざまな語が試みられ、「映画」という語で定着していきます。新しい事物がはいってきて、それと同時にその名前が定着する、溶け込むというより、さまざまな語で表現しながら、どの語を使うと新しい事物にぴったりくるか、日本社会の一つの事物として定着していくか。そこには物事、事物、概念と、言葉、特に漢語とがかかわりあい、試行錯誤しながら、いつしか一つの語に決まっていくな過程を経ていると思われま。

カ、サンフランシスコに視察にいった人の報告に、ベースボール場があったというように、片仮名の「ベースボール」が外来語として表現されます。それが日本にはいつてこの球技がさかんになっていくと、「早稲田対慶應の野球仕合」というように、「野球」という語に変わります

一八九五年の『太陽』では、「其田圃は資本を投すべきの業場にあらずして」とか「大学在職中聊か資金を投じて該器を調製せしめ」といった言い方が先にできます。そこから、「投資」という二字の漢語ができ、「投資」という語で定着していきます(図14)。やはり、概念と言葉が試行錯誤を経ながら一体化して、その概念が日本語のなかにきちんとはいっていくのだと思われます。

また、「摂取」という字面の言葉は、古くからあります。『日本国語大辞典』は平安末期の説話集からあげております(図15)。仏が衆生を救うことという意味です。ところが、近代の福沢諭吉の例をひいている部分には、「自分のものとしてとり入れること。また、栄養になる物などを体内にとり入れること」とあります。随分意味が離れております。ですから、仏教語とは別のところで、新しい意味の言葉ができ、それがたまたま摂取と同じ表記であったので、同じ語のように見えて

百銭の価に十円金を投ずる如く

(『明六雑誌』40号・阪谷素「養精神一説(一)」1875年)

其田圃は資本を投すべきの業場にあらずして

(『太陽』1895年4号・横井時敬「土地兼併の弊害」)

大学在職中聊か資金を投じて該器を調製せしめ

(『太陽』1895年7号・無署名「科学」)

是れコーク製造工業より生ずる利益が資本家をして大に此工業へ投資せしめたるが為なり。

(『太陽』1901年2号・金子篤寿「工業世界」)

図14 「資本(資金)を投ずる」から「投資」へ

#### 『日本国語大辞典 第2版』(小学館)

##### (1) 仏語

(イ) おさめとってまもること。仏が衆生を救うこと

\* 九冊本宝物集〔1179頃〕「摂取の光明は念仏者を照し給ふ」

##### (2) 自分のものとしてとり入れること。また、栄養になる物などを体内にとり入れること

\* 文明論之概略〔1875〕〈福沢諭吉〉五・九「其教は悉皆政権の中に摂取せられて」

#### 『太陽コーパス』

##### (1) の意味 ※漢文の引用箇所だけに見られる

経に「光明遍照、十方世界、念仏衆生、摂取不捨」と云へるを(1895年2号・加藤咄堂「禅学流行の主因及禅宗の現勢」)

##### (2) の意味 ※多く見られる

一は英国の思想を摂取したるものにして(1901年10号・無署名「人物月旦」)

脂肪を摂取して健康を保持し(1925年12号・岡村金太郎「肝油みそ汁の話」)

図15 「摂取」の意味交替

いるのだと思います。一見同じような語でも、そこに意味の大きな違いがあつて、そこに交替が見えているものも結構指摘することができ

ます。『太陽コーパス』には、さきほどの図15の一番目の仏教語の意味は、漢文の引用箇所だけに見られます。多くの例は、二番目の「自分のものとして、自分の精神にとり入れる」、あるいは「栄養として物理的に自分の体にとり入れる」の意味です。このように新しい語が近代でつくられ、そのままスッと定着したというより、さまざまな過程があつ

て、やがてある語に決まって基本語化していくことが見えます。そのあたりをもう少し丁寧に見ていきます。

## 意味変化を起こして基本語化する漢語

図16は、『太陽コーパス』で「活躍」の用例を検索したものの一部です。『太陽コーパス』で検索すると、用例が時代順に並んで表示されます。一番古い例は、明治三四（一九〇二）年八号にある「エミール・オーリック」という題名の記事です。エミール・オーリック（一八七〇～一九三三）とはオーストリアの人名で、その人のことを吉岡芳陵が書いています。典拠の欄が表示されていますが、典拠に記述があるのは、その記事の著者が書いたものではなく、著者がどこから引用しているか、小説の場合だと誰かの会話部分になっている場合です。そのことがわかるように表示されます。

「活躍」の初出例を見ると、典拠「スチューディオ」とあります。調べてみると、当時ヨーロッパに『スチューディオ』という雑誌があったようです。そこに載っているエミール・オーリックについての記事を、吉岡が訳して『太陽』に載せたようです。図16にその例を示しますが、「悉く活躍の妙を呈し来らざるなし」。おそらく、この文の背後に西洋の言語があったと思われる。

もう一つ、『太陽』と比較するために『近代女性雑誌コーパス』で「活躍」を検索すると、最初にでてくるのは「米国ハリス夫人の寄書」（一八九五年二号）です。これもアメリカのフロラ・ビー・ハリスが書いたものを訳したものです。

『太陽コーパス』で「活躍」を検索した画面の一部

10	前文脈	キー	後文脈	雑誌	年	号	題名	著者	欄名	ジャーナル	種別	語源
1	の筆に入るものは悉く活躍	の妙を呈し来らざるなし	大陽	1901	08	エミール・オーリック（本	吉岡芳陵	李庭鈺著	NDC723	典拠	『スチューディオ』	
2	製鋼工場内部の光景を活躍	現前せしむ。さて之	大陽	1909	02	湖山王	佐野天声	文芸	NDC912			
3	妙な調子と青年特有の活躍	たる人生觀に貫かれた	大陽	1909	06	露国軍実主義の創始者（三	早坂夢	文芸	NDC980			
4	を促し、國民良心の活躍	を促すべきである。	大陽	1909	08	政界腐敗の真相	奥田三郎	論議	NDC312			
5	、同僚は其の作品を活躍	せしむと見たのは	大陽	1909	11	文芸時評	長谷川天溪	文芸	NDC904			
6	山陽は人心中に英雄を活躍	せしめ、王政復古を	大陽	1909	12	日本現代の史学及び史家	山陽夢山	人物月旦	NDC210			
7	と云ふ。是れ部分に活躍	する全體の力を看破す	大陽	1909	12	日本現代の史学及び史家	山陽夢山	人物月旦	NDC210			
8	物。風雨乃至風家の活躍	する状態を心算に會	大陽	1909	12	予の意見	斎藤孝の	文芸	NDC910			
9	岩崎親は強に於て大活躍	を認むる可く勉めの	大陽	1909	14	高野田時評を論ず	福田三三	論議	NDC377			
10	關東會館に義氣として活躍	し來つたは當然の事	大陽	1909	14	高野田時評を論ず	福田三三	論議	NDC377			
11	の方面に向つて如何に活躍	して強に才筆を逞ける	大陽	1909	14	早稲田文学士の長短。文学	戸川秋喜	文芸	NDC377			
12	人は無遠慮に、人物活躍	せる事、経歴の口説	大陽	1909	14	平泉の七日（提前号）	黒田龍心	文芸	NDC521			
13	もあり。すべて人物活躍	を見るに至り、七年	大陽	1909	14	平泉の七日（提前号）	黒田龍心	文芸	NDC521			
14	警軍中再び善悪西里の活躍	を見るに至り、七年	大陽	1917	01	論平和恒久戦争	浅田江村	文芸	NDC329			
15	は常に其の才筆で活躍	せしや無遠慮に來らざる	大陽	1917	01	論平和恒久戦争	浅田江村	文芸	NDC329			

彼れは軽く一筆を着けて立ちに物の感情を写し彼れの筆に入るものは  
悉く活躍の妙を呈し来らざるなし

（『太陽』1901年8号・吉岡芳陵「エミール・オーリック」）

貴国の詩人福地源一郎氏が歌はれし帝国萬歳萬々歳なる  
活躍文字を読むにつけ

（『女学雑誌』フロラ・ビー・ハリス「米国ハリス夫人の寄書」1895年2号）

※『近代女性雑誌コーパス』における初出例

西洋語からの翻訳

芸術作品に描かれたものについて

図16 「活躍」の初出例



「活躍」が翻訳語だという研究は、今のところ私が見た限りありませんでした。『太陽』と『女学雑誌』で両方とも最初にでてくるのが、西洋人が書いたものの翻訳であることから、この語は西洋語の翻訳語だと思われます。ただし、これらのコーパスでは原文はコーパス化されていませんので、原語がなんであったかはわかりません。

もう一つ重要なことは、どちらも、絵画や詩歌のような芸術作品に描かれている物象が、その絵や文のなかで勢いよく踊るという意味合いで使われていることです。現代語の、人間などが活躍するという意味とは少し違います。

少し詳しく見ます(図17)。「活躍」という語は、はじめ絵画や文章、芸術作品のなかに描かれているものが勢いよく踊るという意味でした。それは図17の上の二つの例のように「躍動」「活動」など、「活躍」の類義語も同じです。コーパスの初期の例では、これらの類義語は、すべてそのような意味で使われていました。ところが、後期になると、「山本君の精力、あの活躍ぶりは」(『太陽』一九一七年六号、坪内士行「社会劇 都へ」)や、「躍動する人々の数を挙げれば」(『太陽』一九二五年五号、好学山人「我国事業界に於ける慶応閥の努力」)、「国家の活動に依頼して」(『太陽』一九一五年六号、天野為之「国債償還論」)などに見られるように、意思を持ったものが動き回るという意味合いに変わっていきます。

「活躍」一語の変化ではなく、「躍動」「活動」の頻度もこの時期増えていきます(図17)。こういった類義語は同じような意味変化を起こしていたことに、コーパスを見ることが見当をつけることができます。

さらに、数百例がそろってでてくるものを細かく分析していくと、実際に、いつごろ、どのような変化が起こったかがかなり詳しくわかり

美術の大作か宗教的心霊の手に成る偶然に非ず、**霊精躍動**し、神気晃耀たる、雄作が能く人の心をして無限の歓喜と信樂を起さしむるも亦此が為のみ、  
(『太陽』1895年12号・無署名「宗教」)

歴史は記憶の再現にして、**美文**は**空想の活動**なり。  
(『太陽』1895年3号・石橋忍月「美文と歴史との間に一線を画す」)

それに又**山本君の精力**、あの**活躍**ぶりは普通の者には到底出来ないからな。  
(『太陽』1917年6号・坪内士行「社会劇 都へ(二幕)」)

今義塾出身者にして各種の銀行会社に**躍動**する**人々**の数を挙げれば  
(『太陽』1925年5号・好学山人「我国事業界に於ける慶応閥の努力」)

**国家の活動**に依頼して (『太陽』1895年6号・天野為之「国債償還論」)

語	品詞	語種	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年
活躍	名詞-普通名詞-サ変可能	漢	0	1	12	47	82
躍動	名詞-普通名詞-サ変可能	漢	1	3	2	4	8
活動	名詞-普通名詞-サ変可能	漢	106	131	255	268	214

図17 「活躍」「躍動」「活動」の意味変化

ます。このような研究が、コーパスを活用することで新しくできるようになりました。こういうことがコーパスを使う醍醐味だと思います。同じように、多くの語について、いつごろ使われ始めて、どう変化していったのがわかっていきます。たとえば、「努力」という言葉は、きわめて当たり前の言葉のように思えますし、字面自体、古代か

らあります。しかし、現代語と同じ「頑張る」「つとめる」といった意味で使われるようになるのは、明治期です(図18)。「明六雑誌」にも「憤発努力」と使われています。「憤発」とかいいう現代語の努力よりもっと、うんと気合いを入れて頑張らなければいけない、つまり頑張る度合いが当初の努力という言葉のほうが強く感じられます。

図19は、「努力」という言葉と、それにあたる大和言葉、和語の「つとめる」という言葉の前にくる助詞を比較したものです。左側のグラフで青

は「を」をつとめる「功を積むことをつとめる」、つまり、つとめる目的語が「を」で示されるものです。赤は、「

につとめる」です。「実を挙げる事につとめる」。ご覧のように、初めは「を」

が中心でしたが、だんだん「に」が中心に変わっていきます。段階的な少しずつの変化です。一方、右側のグラフ

の「努力」という言葉は、「を」はほとんどとりません。初めから「に」をとる言葉として使われていて、頻度が増

えています。つまり、「つとめる」という言葉が、「を」より「に」をとるよ

うに意味変化して、その意味変化とあわせるように、「努力」という言葉が基本語化していきました。「努力」単独で

竊に望むらくは諸君更に憤発**努力**して速に我帝国至当の治刑條例を草定奏上せんを (『明六雑誌』10号・津田真道「拷問論」1874年)

人あるべし 王法の賞の及ぶところに非ずとも天皇の褒賞必ず疑あるべからざるべしなれば**努力**せざるべからず (『明六雑誌』37号・中村正直「賞罰毀誉論」1875年)

当局者須らく條約上の權利を維持することに**努力**せざる可からず。 (『太陽』1909年4号・浮田和民「米国に於ける排日問題」)

頻度	1874-75年	1895年	1901年	1909年	1917年	1925年
努力する	3	4	10	46	113	116
つとめる	62	501	469	301	224	187

図18 「努力する」の意味変化

温故知新の功を積むを勉めたれば

(『明六雑誌』10号・中村正直「西学一斑(一)」)

聯合の實を擧げる事に勉めて居る

(『太陽』1909年6号・牧野伸顯(談)「名士の奥洪国観」)

條約上の權利を維持することに**努力**せざる可からず

(『太陽』1909年4号・浮田和民「米国に於ける排日問題」)

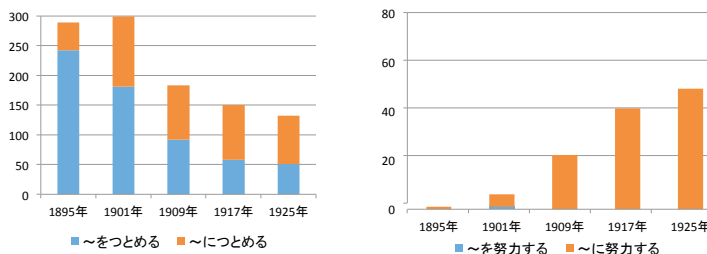


図19 「～をつとめる」から「～につとめる」への変化と「努力する」の基本語化

## 漢語が日本語に溶け込むとき

基本語化するというより、他の語の関係性のうえでこの語が必要とされ、日本語に溶け込んでいったのだらうと思われます。

このように基本語化を、よりわかりやすく溶け込むというような比

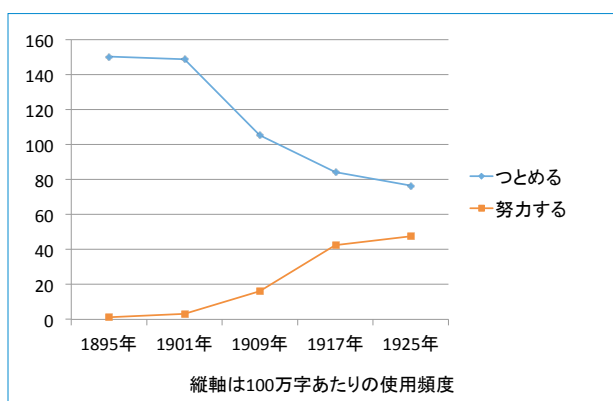
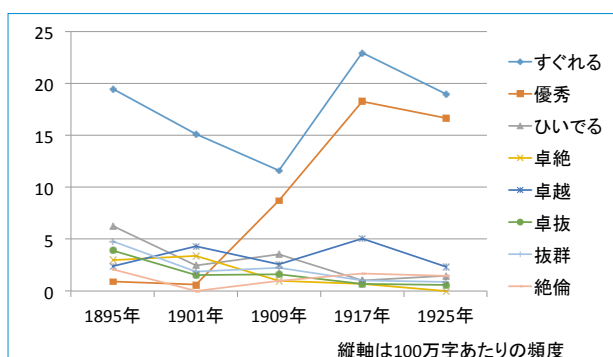


図20 「努力する」の基本語化と「つとめる」



周辺語「優秀」の用例  
 康熙帝自身が優秀なる文学者にして  
 (『太陽』1895年6号・中西牛郎「清朝全盛の時代」)

図21 「優秀」の基本語化と「すぐれる」

日本人は人種として如何に優秀であつても努力なくしては  
 歐米人と匹敵して、事業を經營することは出来ない。[中略]  
 我々は僅か五六十年の内に巧みに彼等の工業の外形を模  
 倣し得る丈の優れた素質を有するのであるから、  
 (『太陽』1925年7号・藤原銀次郎「事業經營上より比較し  
 たる黄白兩人種の優劣」)

放送無線電話聴取用無線受信機を買ふに就て、注意すべ  
 き事は二つある。その一つは感度の極めて鋭敏なるべきこ  
 と、次に選択性の優れたことである。[中略]受信機は  
 単に感度がよいばかりでは未だ完全とは申せないのである。  
 感度が優秀となればなるほど、

(『太陽』1925年2号・安藤博  
 「放送無線電話の発達とその聞き方」)

図22 基本語「優秀」と「すぐれる」の使い分け

喩的な表現をしました。今説明した「努力する」の基本語化と「つとめる」の頻度をまとめると図20のようになります。『太陽コーパス』は年によって全体の語彙量が少し違いますので、これは百万字あたり何回でくるかという頻度を示したものです。ほとんどなかった「努力する」が次第に増加して、「つとめる」とほぼ同じくらいの頻度になっています。和語と対等の漢語になっていったわけです。

コーパスを使うことで同じような変化をするものがたくさん見つかりました。たとえば、「優秀」という言葉は、初めは非常に少なかったのですが、一気に基本語化します。そして、もともとあった「すぐ

れる」という言葉と同じくらいの使用頻度になります(図21)。「卓越」「卓抜」のようなさまざまな類義語もありますが、それらはけっして基本語化することなく、周辺の語に置かれたままです。大和言葉でも「秀でる」という語は、やはり頻度が低いまま、むしろ減っていきます。「すぐれる」と「優秀」の二つが基本語化して、日本語の語彙として定着したと思われます(図22)。このように近代にさまざまな類義語が位置を変えて、そのなかに漢語がはいってきます。

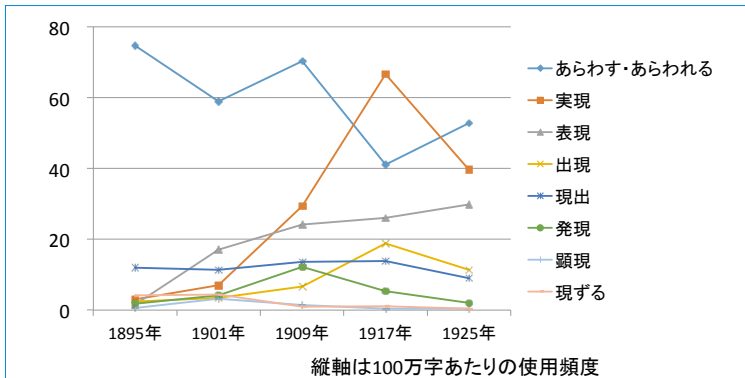
図23を見ると「あらわす」「あらわれる」が少し頻度を減らすなかで、「実現」と「表現」は非常に少ない頻度から多くなっています。この三

語が頻度が高いものとして、基本語化しているということです。当初の使われ方を見ると、「実現」や「表現」は現代とちよつと違います(図23)。「基督に於て実現された完全なる神人の合一」「神と人がキリストによつて合一される」と言うように、実現不可能なことを言う場合に使われています。現代語でもこのような言い方をしますが、現代語の「実現」「表現」の広い用法のなかではごく一部です。そして、「実現」は現代語の場合に比べてな

かなか実現しない、その程度が強い、著しいようなときに使う傾向があります。

当初は現代語の意味と少し違っていたことが、このような例を見ることがわかります。そして、頻度が増えていくことによって意味も変わっていきます。

基本語化した後の「優秀」と「すぐれる」を見ていくと、非常に近い意味で使われています(図22)。同じ記事のなかで、ほぼ同じように、「優秀」と「すぐれる」が使われている例があります。しかしよく見て



周辺語「実現」「表現」の用例

故に支那人は未だ嘗て基督に於て実現されたる如き完全なる神人の合一を予想せざるなり (『太陽』1895年12号・丸山通一「儒教管見」)

諺文は(中略)皆能く其処を得て言語を表現するに於て些の阻碍あらず (『太陽』1895年5号・三宅雪嶺「国字を論ず」)

図23 「実現」「表現」の基本語化と「あらわす・あらわれる」

	何が「あらわれる」か？	何が「実現」するか？
活動にあたる語句	事実、記事、宣言、話、作品、文、歌、文字、現象、現実、問題、出来事、事、行動、発達、 <b>変革</b> 、気風、習慣、制度、(ほか多数)	統一、合同、独立、平和、政治、改正、引退、更迭、協力、借款、撤廃、注文、選挙、利下げ、 <b>改革</b> 、物価を下落せしめること、(ほか多数)
成果にあたる語句	結果、影響、成績、功績、名、實、弊害、弊、(ほか多数)	結果

「あらわれる」：活動によってつくり出されるもの、活動によって見えるようになるもの

「実現」：具体的な活動そのもの、特に政治や社会に関わるもの

此の小作人の思想上に現れた**変革**が、彼等の行動をして力強く或る種の理想到達手段化せしむるに到つた。

(『太陽』1925年14号・中沢弁次郎「農村争議と分配問題」)

併し真成の**改革**は猶ほ**実現**し**無い**、

(『太陽』1917年13号・米田実「露西亞の政局」)

図24 基本語「実現」(自動詞)と「あらわれる」の使い分け

いくと、微妙ですが、使い分けがあったようです。たとえば、「すぐれる」を見ると、「素質」と「選択性」という語句と一緒に使われていて、人や物事の性質について言うときは「優秀」より「すぐれる」のほうを使う傾向がありました。一方、「優秀」は、「人種として」、あるいは「感度」という語句と一緒に使われていて、具体的なことについて言うときに使われる傾向があります。



「実現」と「あらわれる」も違いがあるようです。何があらわれる（出現する）かの「何が」の部分に使われている語句を並べたものが図24です。非常に似た語句があるように見えますが、重なっているものは少ないです。「あらわれる」は、「宣言」「話」「作品」というように活動によってつくりだされるものや、「現象」「現実」など活動によって見えるようになるものが多くなっています。ところが、「実現」は、具体的一回一回の活動、「合同」とか「独立」とかいった語句です。「更迭」「協力」は一回一回の事柄です。どちらかと言うと社会的、政治的なものが多くなっています。やはり、漢語のほうが近代的な文脈で使われやすく、そうでないところに大和言葉、和語が使われます。このことは「実現」と「あらわれる」だけでなく、「優秀」と「すぐれる」でも同じような傾向がありました。ですから、ほぼ同義の意味を表しているけれども、細かいところでは意味によって使い分けられ、和語と使い分けられることで、漢語が日本語に溶け込んでいったと思われる。

## まとめ

漢語は語彙の構成の中間あたりに多くありましたが、それが近代の大きな語彙の変化によって、周辺に位置を変えていくものと、中心に引き寄せられるものに分かれていきます。そして、全体としては減少して、周辺語化して消えていくものが多いのですが、重要な漢語のあ

るものは、中心に溶け込んで和語などと使い分けられていくと言うわけです。

このように、漢語という観点から、近代の日本語がどのようにして新しい語彙体系をつくりあげていったかをコーパスをもとに話してみます。

今回お話しした内容は、私でなければできない研究ではありません。コーパスですから、誰でも使えるかたちで情報がついておりますので、是非、多くの方にコーパスを使った研究をしていただければと思います。どうもありがとうございました。

